

# 「遺族らの方になりたい」

## 西宮の屋宜さん

東日本大震災をきっかけに昨年創設された民間資格「遺品整理士」に、西宮市の屋宜明彦さん(32)が認定された。宝塚市内で中学3年とときに阪神大震災を経験し、避難所で寄り添い、支え合っていた被災地の人たちの絆が今も心に残る。「故人や遺族の思いをすべて整理することで、少しでも供養になれば」。震災から17年を迎え、「支える側」として肉親の死に向き合う人に語り添い続ける。



認定された民間資格「遺品整理士」に西宮市の屋宜明彦さん(32)

方法が分からない」といふ遺族の声に「力になりたい」との思いを強め、22年に新設された遺品整理の専門部署を希望した。

その後、たくさんの遺族にかかわってきた。父の死後約2週間、父のついでに男性が子供のついでに、おやじの剣道着や竹刀を発見し、「おやじが残してきてくれた」と喜ぶ姿が妻をくした男性が「妻の命はいつまで残してほしい」と語った言葉。。

「物語のない人間なんていない。整理中に涙が出そうになることもありま す」。遺族に「思い出チェックシート」を渡して残したい物を話し合う。遺族が語る故人の思い出には必ず耳を傾けるのがポリシーだ。

東日本大震災後に創設された遺品整理士の資格は、上司の勧めで県内で初めて取得した。被災地が増えていく孤立死に心を痛めつつ、プロ意識を持って近畿2府4県で月に約20件、遺品を整理する。資格を持ったことで依頼者の信頼が厚くなったと実感している。

「本なら遺族がすべき役割で私たちが出来るはない方がいい」。それぞれの年で希薄化していくコミュニケーションの中で、遺品で人との絆をたくな仕事に誇りを感じている。

「遺品整理士認定協会」(北海道)によると東日本大震災後、地域の一人ひとりの結束は固く、一人ひとりの孤立死に心を痛めつつ、プロ意識を持って近畿2府4県で月に約20件、遺品を整理する。資格を持ったことで依頼者の信頼が厚くなったと実感している。

平成13年に西宮市内の廃棄物処理会社に就職。20年から粗大ごみ収集隊に兼任。20年から粗大ごみ収集隊に兼任し、倒壊した高齢者の家の片付けや、遺品の整理など引き継いでいく中で、遺品で人との絆をたくな仕事に誇りを感じている。

屋宜さんは平成7年1月、宝塚市内の自宅で被災。付近でガス管が破